

ベンガラのはなし

日野善太郎

平山飯場に初めて飛びこんだとき、

「ウチの仕事はシンドイでえ、やれるか」

と、男みないな口のきゝ方で、姐御がジロリと私をにらみながら言いました。

ジロリ、と一目だったけれど、そのジロリだけで、こちらの頭から足の先まで、素早く観察してしまふジロリだったのです。

網み上りだった私は、それでなくとも、一六〇センチ、五〇キロたらずの小柄で、たよりなく見えたのでしよう。しかし、その一言が、意地っばりの私に、何くそ、という気を起させたようです。

姐御の言葉通り、松本組の仕事はえらかったんです。堀り方でも、コンクリ打ちでも、よその土方の倍ぐらい動きました。

ポヤポヤしている元請の監督が、カードにひびかけられて怪俄をしたり、コンクリートの中へ落ちたり、なんてことは珍しくありません。

それほどスピードで走り廻るのです。ブレーキがききません。うっかり、カーブを切り損うと、サア大変、カートもろとも転落です。その為には足の骨を折った奴もいました。

意気で、イナセで、乱暴で、勇ましくて、まことに爽快な仕事ぶりでしたが、そんな仲間について行くのは、並たいていではありませんでした。

一日の仕事が終ると、使い古しの雑巾みたいにクタクタになって、物を言う気力も残りません。

何しろ仲間たちは「コンクリの松本」言えば、阪神間にその名がとゞろいている一

と自慢して、それを誇りにしているわけですから、大したもんです。タエシタモンダヨイナカノションペンという位のもんです。

今とちがって、生コン会社からミキサ車運んでくるわけはありません。

現場ごとにプラントをこしらえ、ポンプ車もない時代ですから、カートを押して走るんです。それでいて二十坪余りのコンクリなら早出ししないで午前中にすみました。

仲間の一人一人が、そろいもそろって土方のベテランで、若くて、たくましくて、すばしっこくて、生きのいい連中でした。

皿かごに土砂を入れるのさえ、足でふんだり、スコップで叩いたり、ギッシリ固めて、少しでも他人より多くしようと競争だし、そのまた皿かごを肩に乗せたら、モタモタしていません。

ビューッと、新幹線か、ジェット機みたいに走り出します。

コンクリートのカードを押しても、その通りでした。足場板を並べた街道を、たゞもう、まっしぐらのイダテン走り、邪魔なモノはけりとはし、つきとばし、

と、書けば、話を面白くするために、大げさに書いていると、思われるかもしれませんが、ホントウなんです。

二十坪と言えば一一六・六四立米、大型生コン車で約二十六台、団地アパートの一階分の量です。

平山親方という人がまたミキサ車を使わせたなら名人とよびたいほどの上手でした。

八人から十人の、威勢のいいカート押しが競争で走り廻るんですから、ホッパーの中はたちまち空っぽになる筈ですが、平山親方がミキサ車を使うと、かえってカート押しの方が追いまくられるのです。

勿論、ウインチ係は休み間もないし、骨材係も必死です。

そうなるとお互いが意地になり、骨材はミキサ車を追い、ミキサ車はウインチを追い、ウインチはカート押しを追い、ウインチはミキサ車を追い、ミキサ車はポンプ車を使つて機械化され、以前とくらべて、たしかに省力化が進みました。それが、それだから仕事が早くなったかと言つて、決してそんなことはありません。

松本組のようなやり方で、手さえそろえばポンプより早いのです。

交通渋滞もなければ、ポンプの故障もありません。第一、何時間待っても来ないミキサ車に業を煮やし、あとい台ですひのに何やってんだ、早くしろと、生コン会

社に電話でいきり立つこともありませぬ。

監督が計算を間違えて、あと二立米追加というのに、あわてて現場事務所へ飛んで行って、生コン会社に電話をかける。それから一時間も待たされる。なんてこともないし、ポンプの故障で、後続のミキサー車がたまってしまい、修理が終わった頃には、コンクリの硬化がはじまって、また泣かされるということもありませぬ。

だから二十坪余りのコンクリなら午前中に終わります。三十坪（約一七五立米、大型ミキサー車四十台分）までのコンクリなら、朝から弁当を持って行きませんでした。今日のコンクリは二十五坪、なんて聞くと仲間たちみんな、わっと声を上げて喜び、別の現場へやらされる者はブツブツ言ったものです。

よくまあ、あんな仕事を続けられたもんだと、感心もすれば呆れもするのですが、それは私が、まだ三十そこそこの若さで、人一倍意地っ張りで、何貰っという気持ちも強かったからでしょう。

しかし、その松本組に十年も居ることになったのは、やはり意地ばかりではないようです。平山飯場が私に居心地がいい所があったからでしょう。

第一、ここではほとんど残業がありませんでした。これは私のような人間には有難いことなのです。

の順に書いていっているのですが、今、フツと思いついたのは、旭硝子のペンガラ掃除です。

これがまた大変な仕事でした。と言ってもコンクリや、堀り方の大変なのとは、大変の意味が少々違います。

どう違うかというところ、臭いのです。

そう、まったく臭くてたまらないのです。いや、これでは説明になりません。判るように始めから説明しましょう。

旭硝子といえば、日本最大の板硝子メーカーですが、その板硝子を磨くのは、コンベア方式の巨大な工場で、板硝子は工場の端から端へ静かに移動して行くうちに、鏡のようにピカピカツルツルに仕上げられるんです。

そのとき使われるのがペンガラです。ペンガラは、「帯黄赤色の顔料、成分酸化第二鉄」と、広辞苑には出ていますが、とても臭いのです。ウンコそっくりなんです。

磨きながら、たえず水を流しますから、硝子の表面はきれいになります。機械のすき間や、排水溝に、ペンガラがヘドロのようにたまりまます。特にピットの中が多くて、そのために排水が逆流しかねないほどになります。それを月に一度か、二ヶ月に一度ぐらい掃除しなければ

本を読む時間が欲しい（現場への行き帰りの車の中、現場での昼休み、いつも何か読んでいました）、物を書く時間が欲しい（飯を食う時間も、風呂に行く時間も惜しんで、寝床で何か書いていました）、人と会う時間が欲しい（仲間がTVのチャンネルを争ったり、花札をひいているとき、文学仲間の会合で口角、泡を飛ばしていました）、と思いきらしている（つまり、一風も二風も変わった土方だった）私にとって、仕事が、定時あるいは定時以前に必ず終わるということは、何にもまして有難かったのです。

その点、松本組はコマ割りが多く、残業も少なかったのです。賃金もまず世間の相場並み（昭和三十五年一六〇円、六百五十円）だし、屋根があつて三度のオマンマにありつけて、その上、読書や、物を書く時間があつて、門限がなくて、私にはそれだけで十分だったので。しかも好きな酒と煙草は現金がなくても、諸式でとれば不自由しません。ワッ、これは天国！なんて言ったら、笑われますかね。世間のカシコイ人たちに。

いろんなことを思い出すまゝに、しかしなるべく時間

ばなりません。それが私たちの仕事なのです。

臭いし、汚れるし、衣服についた汚れは、洗濯しても落ちません。悪臭は体にしみこんで、道を歩くにも気を使わねばなりません。銭湯へ行って、ふつうの倍の料金を出さないと悪いんじゃないかと思うくらいです。

いや、倍出そうと、三倍はらおうと、他のお客の迷惑そうな顔に変わりはないのです。

他人も勿論いやでしょうが、ウンコ臭い匂いを体にしみこませる本人はたまつたものじゃありません。他人は逃げ出せますが、本人は自分から逃げられはしないのですから。

仕事は長靴、あの漁師が使うような海まである長靴をはいでするのですが、それでも汚れないわけにはいきません。まして、その長靴に穴があいていたりしたら、泣くにも泣けない気持ちになります。ピットの中で尻餅をついたり、バケツであげたペンガラが、何かのはずみにひっくり返って、頭からかぶってしまうこともあります。

ヘルメットもかぶりますが、この仕事に使ったら二度とかぶれなくなります。ヘルメットの本体についた汚れは、洗えば落ちますけれど、あごひもにしみついた臭いは、いくら洗っても落ちません。

夏はまだしも裸になれますが、冬はそうはいきません。

だからこの仕事をする時は、すててもいい古服を着て行きました。

それでも、毛穴や、爪の中にしみこんだ汚れは、風呂に入ってもとれません。

しかし、「人の厭がる仕事は金になる！」です。たしか、二人半役になりました。日当の二倍です。おまけに早く終わりました。三時すぎには飯場にもどれました。

私はすゝんでこの仕事を志願しました。

人より余分に稼ぎたいとか、金を残したいとか、そういう欲はなかったのですが、二人半役の仕事をするれば、一日余分に休めるという計算をしていたのです。

格別怠け者だとは、自分では思っていないません。しかし自分の時間だけは少しでも多く欲しかったのです。

ウンコそっくりの臭いを、しばらく辛抱すればいゝのです。

「オイ、先に風呂に行つて来いや。臭うて酒が飲まれへん」

そんなことを仲間と言われながら頑張りました。ナニ、一ヶ月に一度か、二ヶ月に一度だけのガマンなのです。

それに、この仕事も慣れてくると、要領がよくなって、汚れずにやるコツもおぼえまし、それだけ時間も早く終るようになりました。

するとその内に、二人半役の日当が、二人役になり、一人半になりました。汚れなくなつたし、早く終るようになったからというのが理由です。

ヘンな計算もあつたものです。汚れなくなつたのも、早く終るのも、私たち働く者の工夫で、仕事の内容は変わらないのに、勝手に単価を下げられるのですから、マジメにやる方がバカバカしくなるではありませんか。

そして、もっとバカバカしい思いをするときがきました。

「これからは、ベンガラ掃除は、会社の本工がするから、キミたちはもう結構」

と旭硝子の方が言つてきたのです。

何故、今まで土工にやらせていた仕事を本工がするようになったのでしょうか？

私たちが、ドロドロに汚れ、ウンコ臭くなってピットの中を掃除していたとき、知らん顔していた本工さんたちが、突然、汚れもウンコ臭さもいとわなくなつたのでしょうか。

それとも私たちを使うより、本工が直接した方が経費が安くなるのでしょうか。

そのどれでもありません。

機械が改良され、今までよりずっと、ベンガラへのド

ロがたまらなくなつた上に、掃除も機械化され、仕事はずっと楽になり、汚れなくなつたのです。

ま、当然と言えは当然なことですが、何となくおかしな気持ちになりました。

旭硝子には、本工も臨時工もいますが、汚れる仕事、人の厭がる仕事はせずにすみ、みんな土方が尻ぬぐいさせられ、機械が改良されると、それまで休憩室でお茶を飲み、無駄話をしていた本工が出て来て、土方はポイなのです。バカバカしいじゃありませんか。

こうして、一日二人半役の仕事は、消えてしまいました。言ってみれば、土方なんでもものは人間のうちには入れてもらえず、使いすての雑巾みたいなものなのでしよう。

本工さんは「良か衆一」です。「良か衆、良か帯、良か着物一」です。

オートメーション工場で機械の見張りをして、身ぎれいにして、ろくに体も使わず、毎日をすごして、帰りに工場風呂に入ってネクタイしめて、土方を見るときは虫ケラを見るような目つきをして、盆暮にはポリーナスが出て、それでも足りずに、やれ毒薬だ、やれ責上げなのです。

それにひきかえ勘平さんは……イヤ、土方は……イヤ

イヤ、言うのはやめましょう。どうせ「貧乏人のひがみ」と笑われるだけでしょうから……。

前にも書きましたが、平山飯場は松本組の配下です。その松本組は飯野建設の下請なのです。そしてまた、飯野建設は柄谷工務店と竹中工務店の出入業者、つまり下請です。そして更にまた、柄谷工務店は旭硝子尼崎工場の専属業者です。

これを言い替えると飯野建設から見れば、平山班（飯場）は、自分の下請のそのまた配下です。柄谷から見れば、下請の配下のそのまた配下です。旭硝子から見れば、下請の下請の、その配下のそのまた配下という舌をかみそうな関係になるのです。ゴミみたいなものです。

私はその平山飯場の一土方です。旭硝子から見れば、ゴミより劣るかもしれません。

それでも人間には違いないのです。貧乏暮しで、多少ひがみっぽくなつてはいるかもしれませんが、泣きも、怒りも、笑いもするふつうの人間なんです。世間一般のどなた様とも変りはないつもりなんです。

お酒も飲みたいし、オマンコもしたいし、ふつうの人とチツトも変らないのです。